

新聞報道は 2012 年の金環日食をどう伝えたか

○小野智子、大川拓也 (自然科学研究機構 国立天文台 天文情報センター)

はじめに

2012年5月21日の日食は、日本で25年ぶりに見られる金環日食であった。加えて、東京をはじめ、名古屋、大阪など大都市が金環帯に含まれていたことから社会的に大きな話題となり、新聞、テレビなどのマスメディアで数多く取り上げられた。本発表では、新聞記事を対象とし、この日食と関連する事象がどのように報道されたかを述べる。あわせて2009年7月22日に国内では46年ぶりとなった皆既日食の際の報道との比較もおこなう。

調査対象

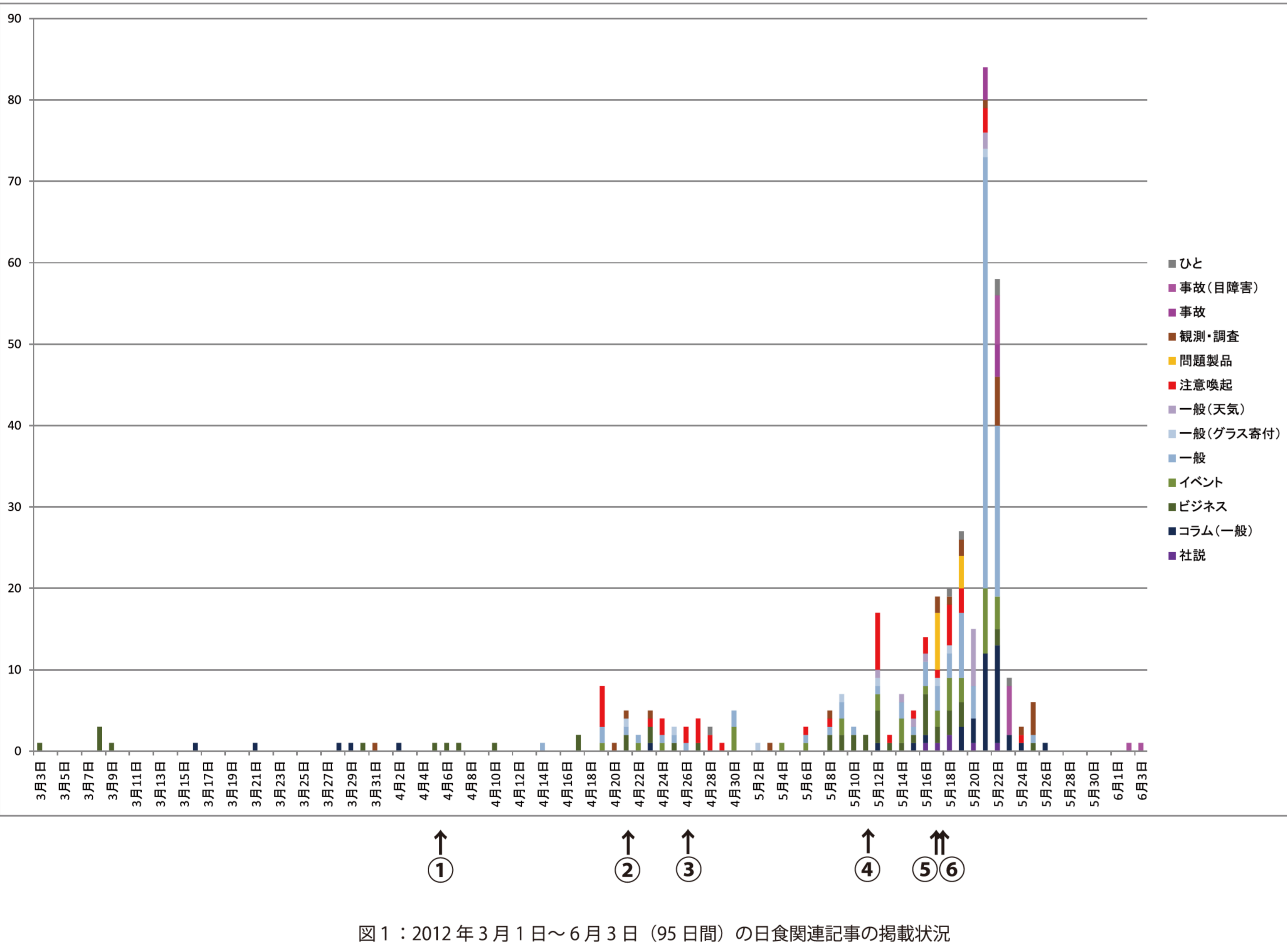
媒体：新聞（一般紙、ブロック紙・地方紙、専門紙）約100紙 国立天文台天文情報センターが利用するクリッピングサービスの対象紙
 そのうち対象となる記事の掲載があったのは47紙（一般紙：9、ブロック紙・地方紙：19、専門紙：19）
 内容：2012年5月21日の金環日食を取り上げた記事（広告記事は含まない）
 期間：2012年3月1日～6月3日（95日間）、うち該当記事の掲載があったのは53日分
 該当記事：375件

記事内容の種別

- 記事内容について、1件の記事について1つの種別を与え、分析をおこなった。
- 社説 各社の社説（一部、記事の性格としては「社説」でありながらも異なる名称を用いているものも含む）
 - コラム 各社のコラム、囲み記事
 - ビジネス 日食に関する商品（鑑賞ツアー、観察グッズ、食品、など）紹介
 - イベント 観察会、工作教室、インターネット中継、鑑賞会などの情報
 - 一般 日食についての一般情報、いつ・どこで・どのように見られるか、なぜ起こるか
 - 一般（日食グラス寄付） 日食観察用グラス（めがね）の寄付や贈呈式
 - 一般（天気） 日食当日の天気
 - 注意喚起 日食観察にあたっての注意・やってはいけないこと、安全な観察方法（木漏れ日、ピンホールなど）紹介
 - 問題製品 性能に問題があった観察器具に関する報道
 - 観測・調査 日食観測から明らかになる科学的事実、太陽に関する研究
 - 事故 日食観察時に起こった不慮の事故
 - 事故（目障害） 日食観察が原因で発症した目の障害
 - ひと 人物記事
- 複数の内容を扱った記事については、
 一般 < 注意喚起、観測・調査など、一般的な内容のものより他の話題を優先とした。

特徴

おもな話題
 2012年3月に入ると、紙面におもに金環日食鑑賞ツアー、便乗商品、日食グラス商戦などのビジネス系の情報が中心に掲載され始め、日食を取り上げたコラムも目につくようになる。日食1カ月前からは、「金環日食限界線共同観測プロジェクト」(Y28a 井上、Y29a 黒河、ほか)について報道でも大きく取り上げられるようになった。同じ頃から、日食を裸眼で観測することへの警告、目を傷めない安全な観察方法の啓発の記事が目立ち始めるようになった。加えて4月終わりには、指導者の下での安全な観察、登校中の不慮の事故回避のための、小中学生の登校時間繰り上げ(または繰り下げ)の事例が紙面を賑わした。4月末から5月初めの大型連休期間は関連する記事の掲載数は少なかったものの、連休明け5月9日以降は連日日食に関する報道が続き、掲載数も10日前から急増している。
 全国各地で見られた日食の様子は、5月21日当日の夕刊、22日朝刊を中心に一般紙のみならず地方紙でも大きな見出しや写真とともに報じられた。その記事数は、5月21日夕刊で72件、22日朝刊で58件にのぼる。



情報発信と記事掲載のタイミング

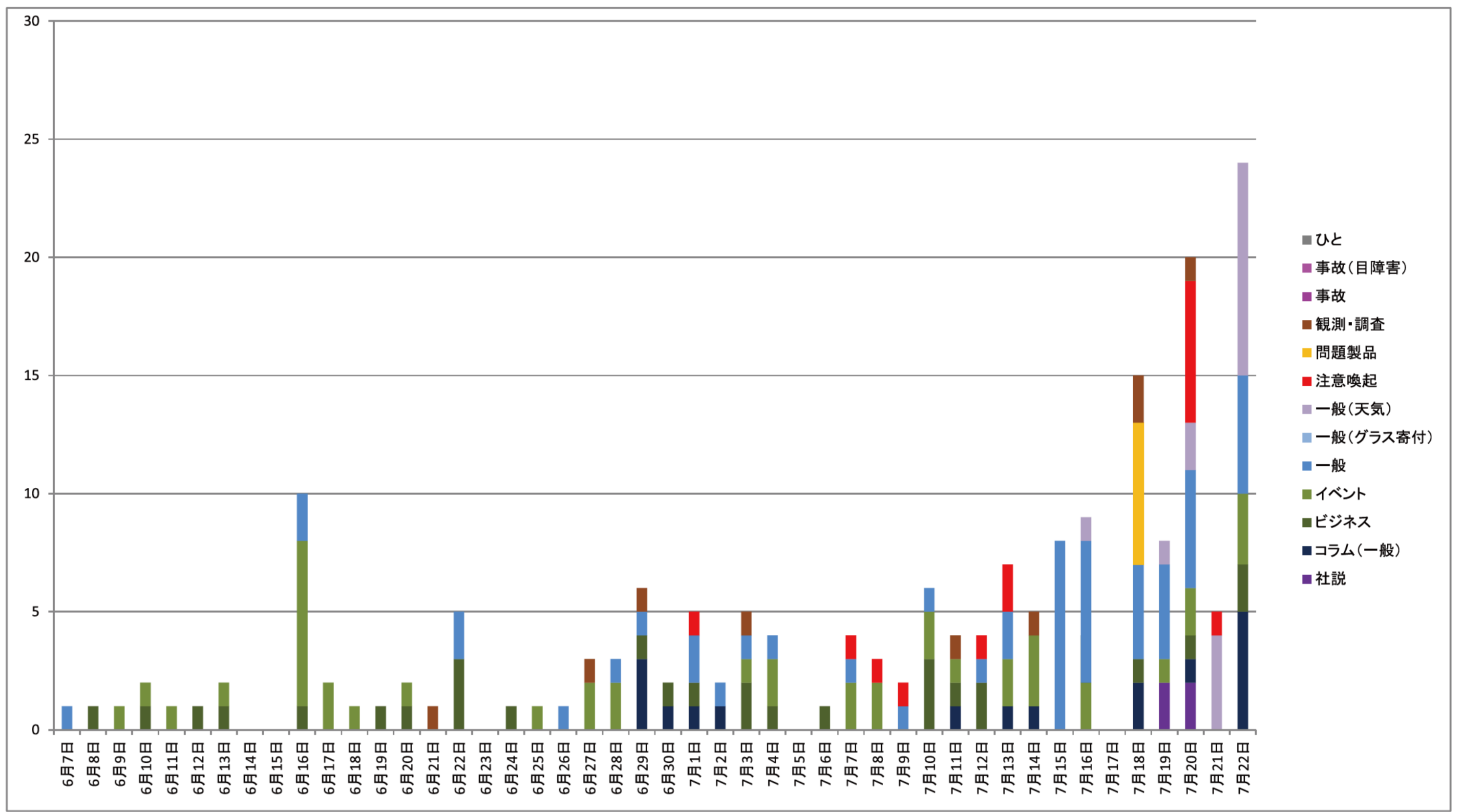
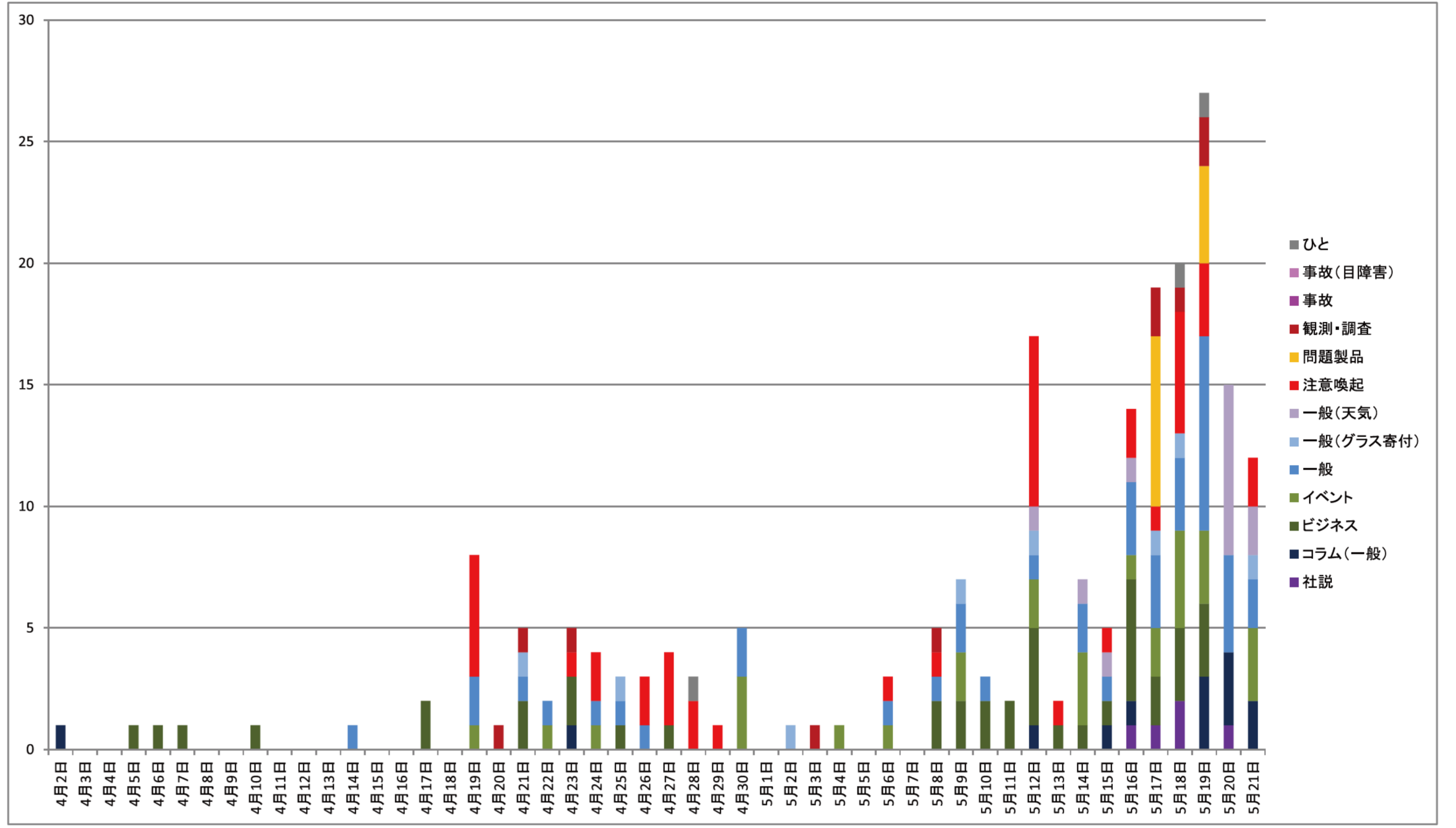
- 日本天文協議会・2012年金環日食日本委員会、国立天文台は、かねてより金環日食についての基礎的情報（現象の起こる時間、観察できる地域、日食が起こる理由など）と併せて、日本眼科学会、日本眼科医会と連携して、日食による目への障害を回避するため安全な観察方法の啓発に努めてきた。その具体的なアクションの時期と掲載記事内容の相関を考える。
- 4月5日 国立天文台主催の記者向けレクチャーで金環日食についての話題提供をおこなう
 - 4月21日 2012年金環日食日本委員会主催のシンポジウム開催
 - 4月26日 日本眼科学会、眼科医会による記者会見
 - 5月11日 2012年金環日食日本委員会による記者会見
 - 5月17日 2012年金環日食日本委員会、日本眼科学会・日本眼科医会による記者会見
 - 5月16・18日 消費者庁より日食観察用グラス使用についての注意喚起（問題ある商品について、18日付けで商品名公表）
 - 5月18日 文部科学大臣定例会見で日食観察についての注意喚起

必要な情報が取り上げられたか

金環日食帯におよそ8300万人もの人口が集中することから、日食観察による目への障害を最小限に回避するための呼びかけを行ってきたが、メディアを通じた広報の成果はどうだったろうか。前述の度重なる報道への呼び掛けは功を奏し、記事掲載というかたちで反映されているようである。

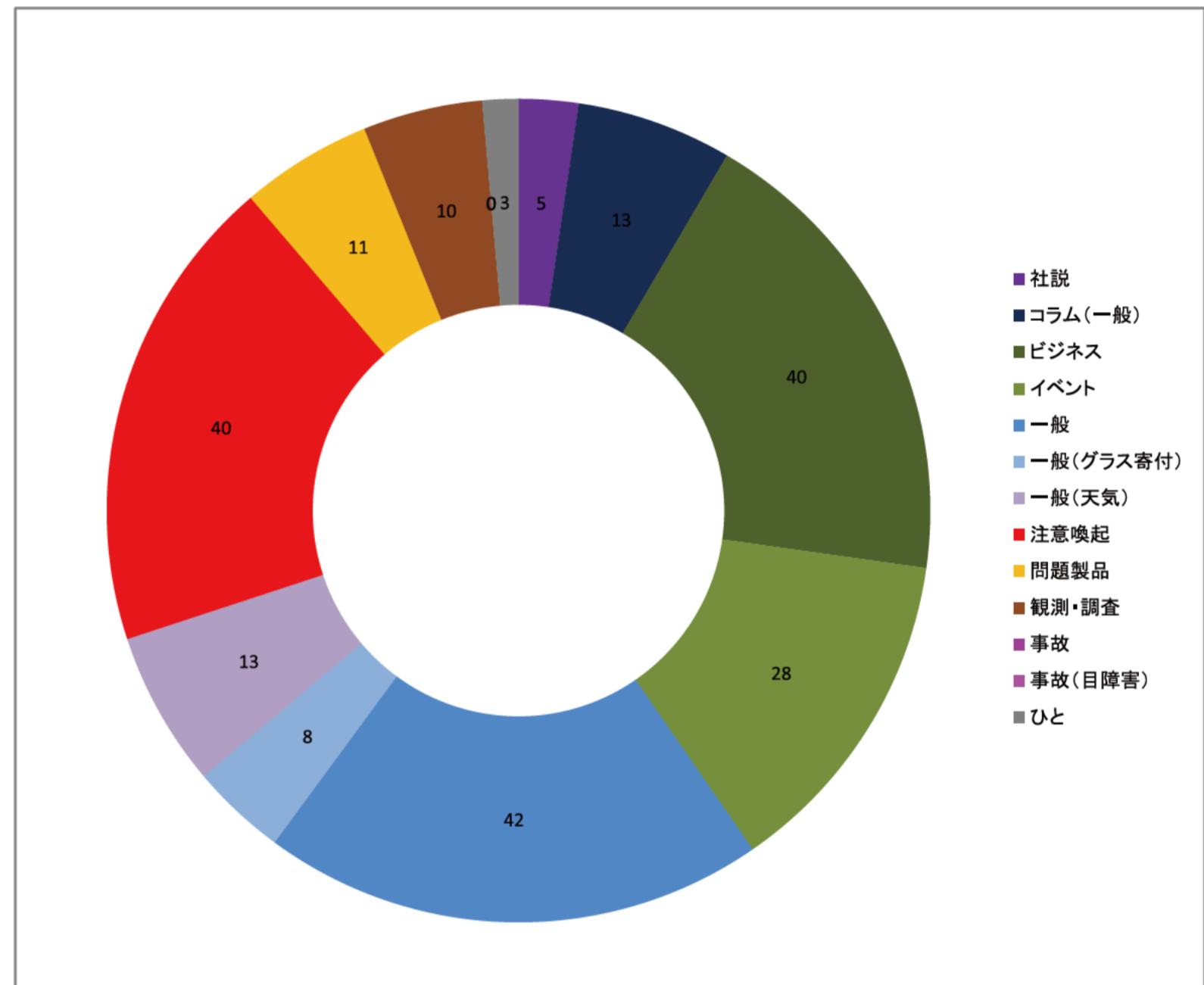
2009年日食との比較

2009年7月22日には、日本の陸域で46年ぶりとなる皆既日食が起こった。この日食も、皆既となるのは限られた地域でありながらも全国で部分日食が見られたことから、新聞報道でも大きく取り上げられた。
 調査の対象となる新聞報道を、日食当日50日前から当日朝刊までとし、事前報道の内容について比較した。



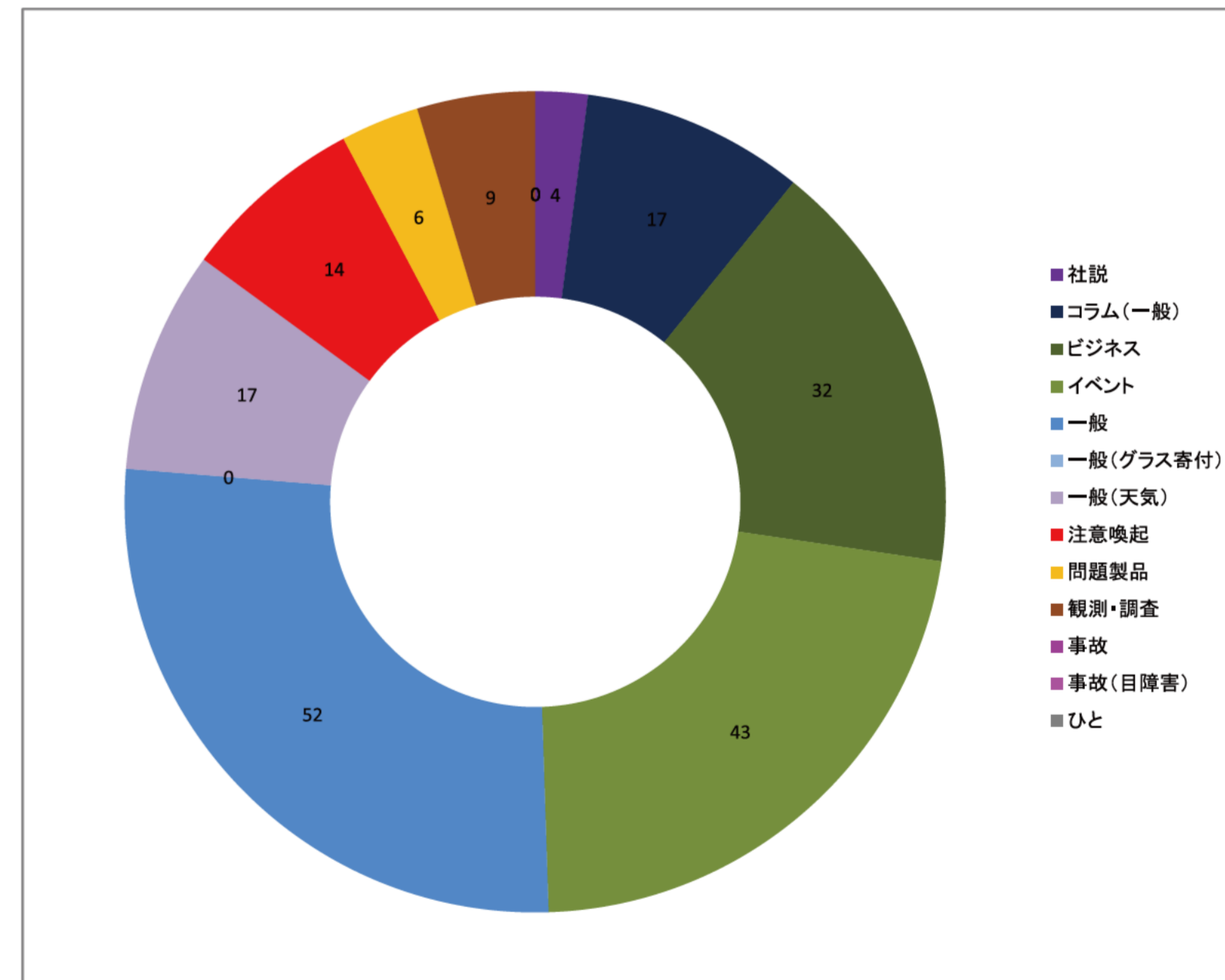
記事の内容の比較

総掲載数は、日食当日まで50日間で2009年=194件、2012年=213件で、優位な差はない。
 図4、5からわかるとおり、2009年はイベントを扱った記事の割合が多い。図3を見ると6月16日に掲載数の山があるが、ある民間会社による皆既日食インターネット中継実施のリリースにちなむものである。これ以外にもさまざまな皆既日食のインターネット中継企画が紙面で紹介された。
 イベントのみならず日食の一般情報が占める割合も、2009年は2012年より多く「事象伝達」としての記事が多いことがわかる。
 「リスク伝達」（「注意喚起」「問題商品」）の報道は、2009年は20件（日食報道全体に対し約10%）であったのに対し、2012年は51件（約24%）と記事としてはおよそ2.5倍になっている。なお、2009年の「注意喚起」には、鑑賞ツアーで中国に渡航する際の注意も含まれるため、安全な観察方法についての記事数はさらに少ない。2012年金環日食に際しての安全な観察の呼びかけは、新聞報道に確かに反映されていると言われている。



社説・コラム

各紙が社説で日食について取り上げている。2009年も2012年も6社だが、いずれの年も社説でとりあげているのは3社。2009年は、観察で使用してはいけない道具（黒い下敷き）への具体的言及があること、太陽観測衛星「ひのこ」の成果を受けたコロナ加熱問題や太陽活動への言及があることも興味深い。2012年は、専用器具を使って目を傷めないようにとの呼びかけと、日食という現象の神秘への言及になっている。
 2012年、2009年とも、各社のコラムで折に触れてより取り上げられている。



まとめ

積極的にまとまった情報を提供することで、「リスク伝達」の記事掲載数を上げることができる。記者が積極的に情報収集することで記事となる「事象伝達」とは性質が異なるため、予測できるリスクを回避するためには、積極的な情報提供が有効。

| | 2012年金環日食 | 2009年皆既日食 |
|--------------|----------------------------------|--------------------------------------|
| 朝日新聞 | | 7月19日 インターネット中継、世界天文年、アポロ11号40年 |
| 読売新聞 | 5月20日 太陽直視の注意・観察方法、太陽研究の意義と政府支援 | 7月20日 世界天文年、肉眼禁物・黒い下敷きダメ、太陽活動停滞期 |
| 毎日新聞 | 5月16日 裸眼直視危険・専用器具を、金星太陽面通過・金星食も | 7月19日 黒い下敷きダメ・減光フィルターを、コロナ加熱問題・太陽活動 |
| 中日新聞 東京新聞 | 5月18日 奇跡のような偶然、不思議は科学の基礎、次は300年後 | |
| 西日本新聞 | 5月17日 400倍の偶然が生む神秘、目を傷めない工夫、宇宙マン | |
| 北海道新聞 | | 7月20日 黒い下敷きや煤ガラスダメ、世界天文年、コロナ加熱問題 |
| 産経新聞 | 5月22日 次世代の科学の扉、地学教育の正常化へ抜本的議論必要 | 7月23日 短期間で成果出ない研究領域への認識、失明警告の大会唱（批判） |

図6：各社社説の2012年金環日食、2009年皆既日食の際の比較